2006年5月27日　朝日新聞

「念じれば動くロボット」の開発を指揮する

ひと

川人光男さん(52)

脳の情報を読み取り、その人とそっくりの動きをロボットにさせる――。SFの世界から抜け出したような新技術の開発を指揮した。

「体を動かせない障害者でも、思い通りに操れるロボット」が将来の開発目標だ。

頭をよぎるのは、郷里の富山で暮らす70代の2人のおばの姿。脳卒中などで、手足や言葉が不自由だ。「研究が役立つかもしれない」と思う。

東大に入り、物理学者をめざしたが行き詰まった。「本当にやりたいことは何か」と進路に悩んだ体験が「心」や「脳」に強い興味をもつ転機になった。「いままでの学問とは違うやり方で、脳を研究してみようと心に決めた」

大阪大講師を経て、京都の国際電気通信基礎技術研究所（ATR）へ。脳科学とロボット工学を融合させた独創的な研究で世界をリードする。

03年からは、脳情報研究所長として約60人を束ねる。管理職ゆえのストレスの解消と「体を動かして脳をすっきりさせる」ために、週1回のソフトボールは欠かせない。

評論家の立花隆氏らと今春、「脳を活かす研究会」をつくった。脳研究の拡大で生じてくる倫理問題を論じ合うことも狙いの一つだ。

「脳科学の悪用を心配する声は多い。でも、研究開発の流れは誰にも止められない。研究の中身をきちんと公開することで、社会的なコンセンサス作りを促したい」

文　山本　智之
写真　永曽　康仁

朝日新聞社より使用許諾済（転載厳禁）